小児科だより vol.86

腸重積

2023.11.1 発行

こんにちは。だんだんと冬の気配を感じるようになってまいりました。小児科外来では、インフルエンザのお子さんを多く見かけるようになってきました。当科では、今年も 10 月中旬より予防接種を開始しております。また、2016 年の 11 月号（小児科だより vol.3）に、『うちの子はインフルエンザのワクチンうったほうが良いですか？』というテーマで書いておりますので、乳幼児にワクチン接種する際の参考にしていただけますと幸いです。

さて今月の小児科だよりは、『腸重積（ちょうじゅうせき）』です。小児科医や救急医にとって、救急外来でピットフォールになりやすく、かつ緊急性の高い疾患として知られています。その理由などについて、考えてみたいと思います。

腸重積とは、すごく簡単に言うと、腸が腸にはまり込んで、腸閉塞（イレウス）などの症状を起こすことです。3 ヶ月～3 歳の乳幼児に好発し、1 歳未満の乳児が半数以上を占めるとされます。男女比は約 2：1 で男児に多く、我が国で年間 4000 例程度発生しているとされます。

主な三つの徴候は、腹痛・嘔吐・血便とされていますが、初診時（救急外来や小児科外来を受診した際）に揃うことは少なく、10～50%といわれています。腹痛は、最初に訴える頻度の高い症状ですが、病初期は間欠的（良くなったり、悪くなったり）に出現します。数分間の腹痛があり、その後しばらくは間欠期となって痛みが和らぐため、機嫌よく遊べることもあります。また好発年齢のお子さんが、腹痛を腹痛として訴えることができるかも考える必要があります。実際には、顔面蒼白、『ぐったりしている』、『寝てばかりいる』、不機嫌といった症状から診断されることもあり、これらはショックや意識障害を伴う重症例の症状である可能性も念頭において慎重な対応が必要となります。

腸重積は進行性の疾患ですが、早期診断によって手術を回避できる可能性が上がります。超音波検査は、比較的診断精度が高く、お子さんの負担も少ない検査ですので、早めの受診を心がけましょう。ロタウイルスワクチンは、腸重積のリスクをわずかに上昇させることが示されましたが、腸炎を予防する利点が上回ったことから、2020 年 10 月から定期接種となりました。最新の報告では、むしろ腸重積の発症を抑制する傾向が示されています。接種できる期間がとても短いので、お子さんが生まれたらできるだけ早めに接種スケジュールを確認しましょう。